

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	『説経集』を通してみる中世日本人のこだわり : 上原輝男講義録 ② 国文学講義 (昭和59年度) より
Author(s)	宮田, 雅智
Citation	国語教育思想研究 , 29 : 46 - 50
Issue Date	2023-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053959
Right	
Relation	



『説経集』を通してみる中世日本人のこだわり
—上原輝男講義録② 国文学講義（昭和59年度）より—

キーワード 中世の教育 日本人の時間性・空間性・人間（ジンカン）性 霊格

児童の言語生態研究会 宮田雅智

はじめに

この講義は半期の選択科目でした。履修していた学生は主に上原研究室所属の3年生4年生がほとんどでした。

内容としては「説経集（かるかや）」（昭和52年 新潮日本古典集成 新潮社）を通して、学校教育制度も寺子屋などもなかった時代の庶民教育はどのように行われていたのか、そしてその当時から「人間を育てる」ことに欠かせないものとしてどのようなことが意識されていたのか、それらを現代の教育に生かす、という視点を持つということが大きなテーマの講義でした。

中世（～近世）に大切にされてきたことは、現代の教育カリキュラムとはかなりの隔たりのある内容ですが、「人間を育てる」という視点から考えれば、今でも欠かせないことばかりです。

というよりも、そうしたことが現代の教育では失われてしまった故に、様々な歪みが生じてきて、なおも混迷している、というのが実情ではないでしょうか。

尚、講義中には卒論のテーマとして、幅広い視点が紹介されていました。今回の抜粋の中でもいくつか紹介しましたが、テスト対策が教育の社会要請であると考えている現場の先生方には疑問を抱く内容ばかりかもしれません。

しかしそれを時代錯誤と頭から決めつけてしまっているのでしょうか。人間としてしっかりと成長することなくして、テスト対応などの現実対応は意味をなしません。また、そうした土台をしっかりと育てることがあって、はじめて真の学力を身に着けることにもつながると考えます。

1, 世界観を説く説経集

教育学科の学生さんだからということにおいて、皆さんの立場を大事にして、国文学という学問を教育学の方から考えてみたときに、どうい

ものをみておいて頂くのがいいのかということでもって選んだのが皆さんが持っている説経集であります。説経の「きょう」の字が違う。教えを説く方ではなく「お経」を説く方なんです。経本というのは縦筋ですね、この「経」っていうのは。基本線ということです。基本になるもの、ということですね。ですからよく小原先生は教科書の事を「お経だぞ、これは」昔はよく玉川の学生に「もっとお経を大事にしなくちゃ」と言われたりしていました。こんにちで言うならば教科書がお経にあたりわけです。そう言ってちっともおかしいことではないんです。

特に私が説経を選んだという理由。昔の人たちは、特に江戸時代なんかは寺子屋なんていうのが非常に発達していて、これは世界的な視野においてながめてみても庶民の教育が江戸時代にかなりきわだっていた。きわだっていたから近代国家に日本は移し替える事が可能だったわけです。

じゃあそれ以前までの教育はどういう場面で日本では庶民教がなされていたのか？というところは宗教の世界とすることができるとですね。生活するということと同時に、それは宗教生活をしている。宗教的な雰囲気非常に強かったんだということです。で、この説経集を読んでも特別りっぱな宗教解説がなされているということではありませんけれども、庶民が庶民の為にこういうものができあがっていったわけですから。ですから、主に中世ですね、中世の庶民がどんな教養を身につけていたか、ということを知る為には非常に大事な書物だと言えるわけです。

説経は御本地の物語をすることにある。御本地物語です。「ただ今、説きたて広め申し候本地は・・・」と本地を説き明かしてみせる、ということなんですよ。「本地垂迹の世界の中に人間は生きている」ということだったんですよ。ある一つの宗教流派の考え方だ、っていう風にしか学校教育では教えていないけれども、そうではないんで

すよ。世界観なんですよ。だからこれは宗教観というよりも元々人間にはそうした意識があったと考える。「あの世」があって「この世」があって、それから「先の世」がある。「前世」「今生」「来世」この3つの世界に住み分けているんだ、ってこう考える。こう教えられていたんですよ。

現代人といえども同じ事だと思っんですよ。「私は今、現れてるにすぎない」んですよ。「死んだら私を今、生かしているこの靈魂はどこに行くんだろうか」思わないのは現代人だけですよ。「死んだらおしまいよ」なんて無理矢理否定してる。

この世の中を追っかけてみたってしょうがないじゃないですか。この世の中が忘れたものを、そして忘れて忘れかねているものを見つけだそうとしなくっちゃダメですよ。私の師匠（郡司正勝）は今度本を書かれた。「童子考」っていう本を書かれた。その中にこう書いてある。「この世の中でどっかに私たちが見落としていたあの世からの信号があるんじゃないだろうか」って。「信号がもっともっとたくさんあるんじゃないだろうか」って。「それを掘り当ててみたい」って。本気で書いているんですよ。私もそう思いますね。

2, 日本人にとっての日常

「教育っていうのは日常から離れてはならないんだ」ということを私は国語教材で言っている。離れてはならんのですよ、教育は。日常性から遊離してね、何か立派な事ができたからってそれは教育ではない。だから日常生活が改変されていかなければ教育の実が上がったとは言えないんですよ。皆さんの時代だけですよ、こういうことを知らないのは、悲しい日本人が今できているんですよ。今の留学生は今の若い者には全然興味がないと。むしろ年寄りに興味がある。そう言いましたよ。何故かという日本を何も知らないからだというんですよ。

日本人が生活するというのは何かというと、四季折節と重なっていくことなんですよ、生活することが。今、自然は四季折節がこう変わろうとしているんだということ、それに順応することであるし、それを鑑賞することが日本人の生活だったんだということですよ。それを若者なんて全く忘れているんです。

昔の人はモノを食べて「ああ、春がきた」「あ

あ、夏がきた」と言う為に、その証明の為にモノを食べていたんですよ。そしてそのことを喜んだ。「ああ、旬のものが食べられる」って。私は「今日を生きている」ということが分かったんですよ。それが日本人の生活だった。そういうものの定位置が「家」でしょう。

私は昔が良かったということをお願いしないで、これからの日本人はどう生きなければならないかという課題でもあろうと思うから、むしろ私らの時代からは答えが出せないかもしれないけれど、諸君等がやがて答えを出さなければならぬ。人間の生活って一体何か？それを次々に自然が感じさせてくれるだとしたら、その自然を感じる事が暮らしだと思っっていたんですよ。

3, 説経「かるかや」にみる人間成長の着眼点 ＜重氏の出家＞

「書き置き」なんていうのはね、これは私は教育学科の材料だと思っんだよ。「遺言書」なんていうのはね、教育学の資料として集めなければならぬと思っますよ、私は。私の研究室でそのごく手軽な研究はしてもらいましたけどね。戦没学生が書き残した遺書の研究。これはもう、時代をズラッと連ねて「どんな時代にどんな書き置きが残っているか」を考えていけば、人間がどんな風に教育されて、どう生きがいととしていたのか歴然じゃないですか。そうでしょ。そしてこの時代はどう生きようとしたのか分かるわけでしょ。我々も所詮は皆さんも私も含めて「この時代の子」でしかないんですよ。

何を書き残そうとしているのかはよくわかるわけですよ。やっぱり、一番多いのは子どもの事に集まってくると思っんです。そうすると「子どもの役割」っていうのは何かを親は考えているかわかるわけですね。バトンタッチ・・・やはり継承者をどうするかという事ですから。次の世をどうさせるかということですから。

＜僧侶の門弟に＞

日本の教育というのはそれだったんですよ。子どもの子弟教育というのは。大きな威霊を持った、靈魂を持った人の側にやるんです。そしてそこでその人にお仕えすることによって受けるんです。大事なことは先生のお世話をするとか、そういう

ということだけじゃなくて、その基本は「靈魂を持った人からその靈を移してもらう」。移るんですよ、子どもに。感染するんです。「教育は感染作用だ」と言ったのは折口信夫なんですよ。

教育を考えるとということは結局は「威力の推移」というか、「威力の移し替え」と言えばそういうことにもなるでしょ。次代を扱う者たちの育成っていうことだ。それは当代を扱っていた威力を次へ移す事ということになるでしょ。だから今私は諸君らに何をやっているかという「私の持っている威力」を諸君らに移しているんですよ。で、私の持っている威力は私がどんどん年をとっていったらだんだん衰弱してくる。それは諸君らへ吸い取られるからです、ええ。こういう考え方をしていたかもしれないんですよ。少年教育というのが中世から江戸にかけてどう行われていたかは、もっと考えなければいけないですね。

諸君は教育者になろうとしている。人間の眼(まなこ)の据え方を子ども達に教えなくてはならないということなんですからね。何を覚えておきなさい、なんていうことではないんですよ。目のつけ方を教えなければいけませんよ。

<残された息子たち>

教育の基本は、何も儒教だとかね、仏教だとかね、関係ありませんよ。教育の基本っていうのは親子の情がわかるということです。それを小学校の先生が忘れたから、だからこんなにおかしくなったんですよ。昔の小学校の先生は偉かったですね。そんな難しいことなんて教えなくていい、教えるのは忠孝だけ教えていけばいい、って思っていた。それができれば小学校は卒業だと思っていた。それが大事だったんですよ。

小学校の先生が教員になったからダメになったんですよ。小学校の先生は違っていたんです。「訓導」だったんですから。「小学校訓導」っていったんですよ。中学校から上を教員っていったんですよ。ところが小学校の教員がこれを捨てた。みんな中学校以上の先生の真似をしたんですよ。

「孝」は教えないと。私は親不孝者は嫌いだ。なぜなら人でなしだから。人を理解するには親を敬う。それができるものは必ず人間になっていく。これをこうやって書いていたんですよ、説経は。だからこれは立派な教育書といえるわけです。こ

ういう書物があったから学校教育なんてなくても、中世なんかもひどい時代ですけども、基本は整っていたといえるのではないですかね。

<神仏の世界との交流生活>

本地垂迹の専門的な話は今はしませんけれども、形式でいうならばね、二つの世界の共通性というのを人間は考えるんですよ。私なんかもそう考えている。別々の世界であるにも関わらず、その二つの世界は因果関係を持っている、というふうに考える。私なんか思い切った言い方をしろと言われたら そういう習性がある と思っているんですよ。人間には。

重ね絵をするんです、人間は。「二つの世界」というのをなんで人間は一緒にしたがるんだろう、って。錯綜させるんですね。交錯させることの何かを持っているということです。

「陰と陽が裏表」なんていうのだって、私はそう思っている。何故 裏・表 を考えなければならぬのか。それは「二面性は共通性がある」「二面性は関連性がある」と思うから、っていうのがもともとなんです。それを考えているんです、私は。面白いと思いつつながら。

<空海の生い立ち伝説>

捨て子の話もまた教育学の論文になるんですよ。誰もまだ書いていない。「教育学と捨て子なんて関係ない」という教育学しかやっていないからダメなんです。教育学を考えるためには「捨て子」あるいは「申し子」こういうのを研究しなくちゃ、本来の教育、日本人が何を教育として考えてきたのか、に答えを出すことにならない、と考えるような教育学を学ばなければいけません。

だからこそなんですよ。捨て子の意識がある。一般庶民にも我々にも関係あるんです。だって、言われなかったですか? 「お前は橋の下で捨ててきた子だ」 どのうちでも一回くらいは言っているんですよ。「言う事きかないのは、やっぱりお前はあの時に橋の下で捨ててきた子だから」なんてことを親は言うわけですよ。

伝説の研究 っていうのは絶対教育学の人たちは離してはならないテーマ。文学研究者が伝説の研究をやるよりも、教育学の人たちが伝説の研究

はやらなければならない。『人間はどう人間を作りたいのか』ということは伝説をやらないと分からないですよ。だから教育学の卒論の中にもっと弘法大師の伝説の研究とか小野小町の伝説の研究とかね。どういう女性が素晴らしいとされていたのか。

4. 霊格を高める教育

我々は文学を読み過ぎたんですよ。あるいは文学文学って言いすぎたんですよ。文学はしょせんは我々のイメージの整理なんですよ。人間がイメージを持つことを、それを模っているまでなんです。だから教育学の皆さんが対象とするのは、文学を素材として・・・人間的素材と思え、ということなんです。

そういう風に考えてみると、親子のつながりというのが物語になりやすいということは、親子関係というのは人間のイメージとしてあるんだということです。母が子を想い、子が母を想うというのはですね、それは人間の特性なんですよ。しかもそれはイメージとしてあるんだと。だから重ねているんだということです。重なるんですよ。

別の言葉でいうと同情という言葉がありますよ。同情というのは同じ情けになる。あの言葉を分析すると、同じような感情に浸る事だ、って思うでしょ。その前に 同じイメージを持つ ということですよ、同情するというのは。「他人ごとではないわよ」って言っている、それが同情ですよ。「他人ごととは私は思えません」という。じゃあ他人ごとと思えないんだったらどうかというと、わが身と引き比べっていうんですよ。わが身と重ね絵にする。これが面白いところですよ。

意識的に考えてみても、人間っていうのはおんなじことをやっているんじゃないですか？立場が違って来るだけですよ。かつては子どもだった人間が今度は母の立場になる。母の立場になるということは子どもを持つ。そしてその子を導くためには、自分の持っている親子のイメージを、親子関係のイメージを適応していくんですよ。

人格はたいしたことないんですよ、日本人にとって。人格が一步高まったやつを 霊格 という。つまり神様に近い・・・それが霊格なんです。霊格とかかわるものなんです、これら全部。だから お祝いをする というのは、その人が霊格に

近づいたことを祝っているんです。いいですか。世俗さを祝うなんてしていないんだよ。「何か特殊な霊格がついた」というんで、「さあ、それを神がかってなくちゃだめなんじゃないか」っていうことで。

「イ」っていう言葉がつくのは人格を対象とするのではなくて、霊格を対象とするから。「祝う」がそうでしょ。「祈る」がそうでしょ。お祈りしましょう、って。人格を離れるんですよ。

そうするとね、教育学がいつまでも「人格の陶冶」なんてことばかり言っているからダメなんだよ。もう言い換えなくちゃダメだ。もうボツボツ言い換えなくちゃ。教育の目標。教育の目標は何なのか。人格からさらに霊格へ向かおうとする営みだと言わなくちゃいかんのではないですか。

人格という言葉すらこんにちでは分からなくなってきている。「人間形成」なんてバカなことを言い出すでしょ。人間なんて形成できませんよ。あんな言葉なんて使わないでください。

人間というのは人間関係なんですから。人との間と書くんですから。「人格陶冶というのが行われ人格の形成」というのならいいでしょう。でも「人間の形成」なんていうのはできないですよ。間違っちゃいかんですよ。

***** 解題

この講義では「説経集」本文の内容と関連して非常に多岐にわたっての講義がなされていました。そういう点では、先生の著書の中での「かぶき十話」(前掲書)「曾我の雨・牛若の衣裳」(前掲書)に近いと言えます。

先生としては、日本人の解明がここまで進んでということを紹介しようとしているわけです。しかし残念ながら、例えば かぶき十話 であれば「歌舞伎などには関心がない」という感じで、多くの方々にはなかなか読んでもらえないわけです。仮に読んで頂けても、先生の書き方は具体的に「生き方」や「教育」とこのようにつながる、という示し方はされないことが多いので、読者は「だから何なの？」という受け止め方でおわってしまうことが少なくありません。

先生がなぜ「具体的に〇〇にこのように結びつく」式の書き方をしていないのか。直接先生に伺ったわけではないですが、仮に先生が「このこと

は教育にこのように結びつく」と述べたとしたら、例示したことが逆に縛りとなり、読者の発想を狭めることになる、だから先生は敢えて具体的にどのようなことに関連するのにはほとんど触れずにいたのだと思われま

す。上原先生の師匠である折口信夫先生の使われた言葉に「類化性能」というのがあります。一見すれば別々の関係のない事柄にみえる間に、共通する何かを見出し、つなげていく力」、これはまさに数学的発想ともいえます。数理思考の獲得は人間形成にこのような形でも寄与します。

先生が教育学科の卒論のテーマとしていくつかのことを勧めています、これらも類化性能を発揮しながら考えていけばなるほどと納得できるのではないのでしょうか。

多岐にわたる先生の話をとらえる際に、もう一つ注意したいのは「並列的」にではなく、多重構造的に重ね合わせて同時にみていくということです。上原先生の師匠である歌舞伎が専門だった郡司正勝先生のこのような言葉があります。

『歌舞伎狂言の構成は、仕組むとって、いくつもの世界を、時代の違う世界を、同時に組み合わせて緋い交ぜ（ないまぜ）にして作劇する。（中略）これに有機的関連性をもたせ、最後には一つに纏（まと）まって決着がつくこうしたのを上々とする。

こうした構造を芸術の基準としている、その構造が理解できなければ、おそらく絶対にわからないであろう。近代の学校教育は、西欧的理念と方法によったものだから、はなはだ合理的科学的で、そうした教育がすっかり身につけているインテリにとって、こうした江戸の文化の構造や発想様式は、習いもしないし、生活にもないとすると、もう体質的に受け入れられなくなっているのである。日本人も、まったく西欧人なみの頭脳になっていて、すでに江戸人とは異質の人種になっているのではないか。

江戸人の目は、いくつもの世界を、同時に一緒にみる能力があった。トンボの眼のように、複眼的構造は、同時に、いくつもの事象をうつしとることができる。（中略）なまじい教育のある者にとっては矛盾として受け入れられないものを、おもしろしとして、そこに見るべきものを見た世界構造。それが歌舞伎の構成であった。』

（芸能の足跡 郡司正勝遺稿集 2001年 柏書房）

国文学講義の最終回はこのようにしめくくられました。

『ついこのあいだまでの文学のテーマは何であったかという人と神と あるいは人と仏様の関係。言い方をかえると、人があの世とどう行き来するのが大事なテーマだったんですよ。神様や仏様がこの世に姿を現すんだ、ということになると今度は神の国から人の国へということになるんですよ。・・・完全な乞食がゴロゴロしていたから。あれはもしかしたら仏様が姿をかえて現れているのかもしれない、とかね。

つまり人間のイメージ世界を大事にしてくれる。そういう人たちが大勢住んでいた。それは科学が進んでいなかったんだ、なんていうことは全然違う。人間をつくりあげる世界をうんと大事にしようと思っていた人たち。少なくともそういう大勢の人たちの中に僕はいたな。』

補足

児言態とも関りが深くイメージ研究の第一人者であった藤岡善愛先生は「弱肉強食・適者生存・反復説などの古典的な進化論が現代社会の常識に大きな影響を与えている」と話されていました。実際の自然界はそれでは説明つかないと。（平成3年4月6日の会合）

また、玉川大学教育学科1年次必修基礎自然科学講義（昭和56年）において、担当の満尾寿男先生は「物理学は思想である」という前提で「（日本でいう江戸時代の頃の）ニュートンの古典力学の基本姿勢は「絶対性」。その後アインシュタインの「相対性」、そして最先端の現代物理は「相補性」が基本姿勢。にもかかわらず、現代人の常識は絶対性に留まっている」と指摘されていました。確かに競争原理にしても、小学校～高校の教科書にしても「ニュートン力学の理解のため」が大前提であり、常識となっています。

実際に最新の進化論や量子論、あるいは人体に関する研究の成果などをみると、先生の説かれている古来からの日本人の発想法と重なる部分が多いことに驚かされます。そうした理系分野も人間理解を深める上で欠かせないと考えます。